令和３年度　渋谷区立広尾幼稚園　園経営方針

渋谷区立広尾幼稚園長　　木下　和弘

教　育　目　標

〇自分でできることは自分でする子ども　　〇よく考え、すすんで行動する子ども
〇元気で友達とよく遊ぶ子ども　　〇心の豊かな子ども

〇自分でできることは自分でする子ども

①年少、年長それぞれの発達段階に応じた基本的な生活習慣の育成に努める。各家庭における基本的な生活習慣には差異がある。幼児一人一人の実態を見極め、それぞれの違いを認め、個に応じた支援を行う。

②特別な教育的支援を要する（介助）幼児については、家庭と十分連携・相談を行いながら、できることは伸ばし基本的な生活習慣の定着を図る。

③一人でできたときや、できないことができるようになったときは、具体的に大いに褒め、成功体験や自己肯定感が高まるようにする。

〇よく考え、すすんで行動する子ども

①４歳児、５歳児、それぞれの発達段階に応じて、善悪の判断や生きる知恵を身に付けさせる。幼児の心の迷いや友達とのトラブル等を簡単に解決させるのではなく、ある程度の時間を掛けて幼児自身に考えさせたり、解決の方法等を見付け出したりできるように支援する。

②よい行動や言動は友達の前で認め、褒め、日常の生活の中で、善行の積み上げを意図的に行い、自信をもって行動できるようにする。

③教師や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりできるようにする。

〇元気で友達とよく遊ぶ子ども

①幼児は、遊ぶことが大好きで仕事である。遊びを通して体験し、体験を重ねていくことで遊びがより一層豊かになっていく。遊びと学びの循環を良好にするよう努め、園児同士の相互の人間関係を豊かにしていく。また、園庭や園舎の安全管理は十分に行い、幼児が安心して遊べるような環境作りに努める。

②家庭と連携協力して「早寝・早起き・朝ご飯」の指導を徹底し、規則正しく健康な生活ができるようにする。

〇心の豊かな子ども

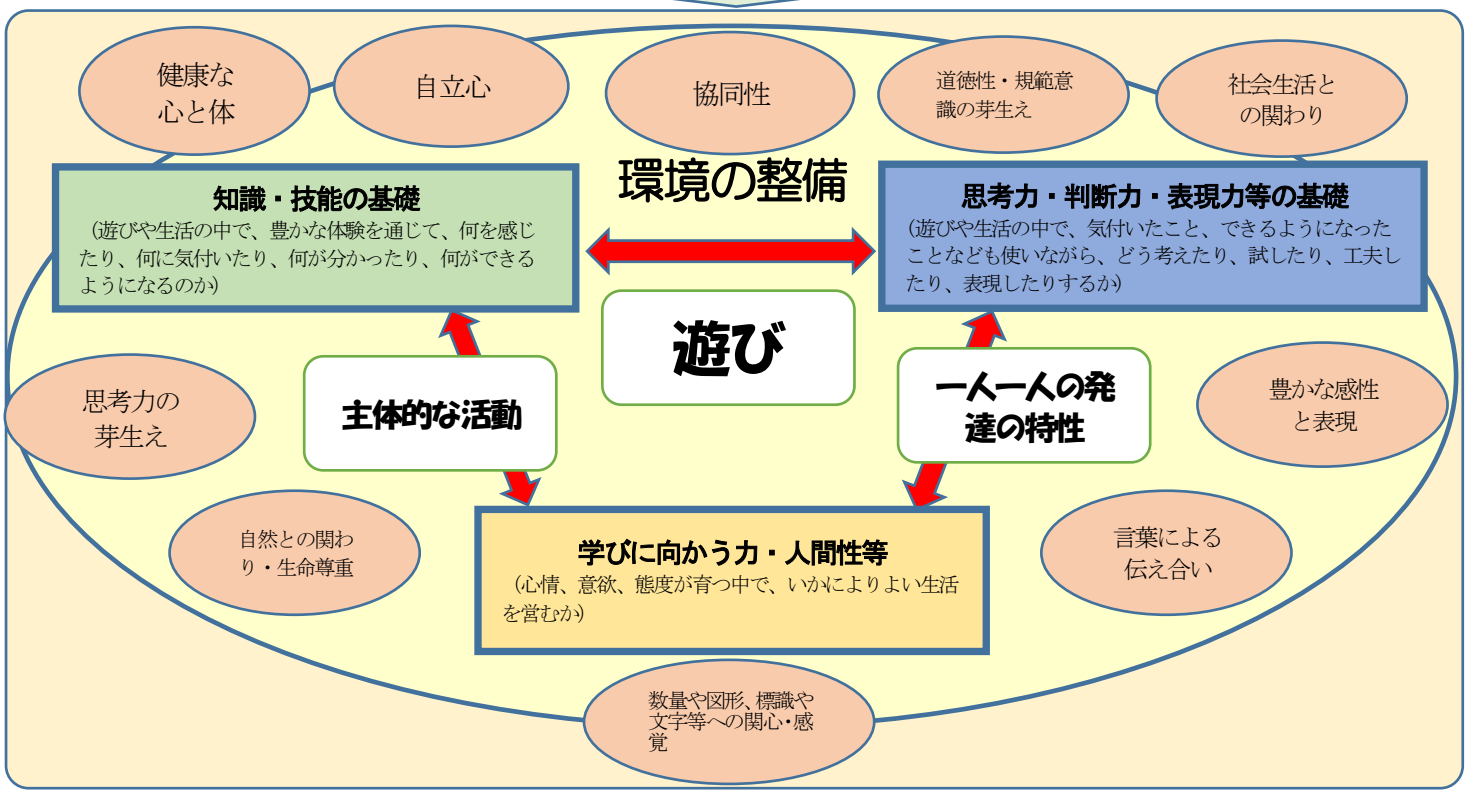
①あいさつは人間関係づくりの原点である。豊かな心は豊かな人間関係から生まれる。元気のよい明るいあいさつに溢れた園舎は豊かな心の象徴である。教師自らが、一人一人に声を掛ける。

②命の大切さや自然の不思議さなどを、体験を通して気付いたり、感じたりすることができるように動植物とかかわる機会をもてるようにする。

③豊かな学びは、豊かな感動体験から生まれてくる。よりよい感動体験の充実を図り、一つの感動を皆で共有できるように努める。

④本の読み聞かせや毎月のお話し会を通して、本に親しみ豊かな感性を培うように導く。

小学校教育への円滑な接続



【目指す幼稚園像】

（1）幼児が「登園が楽しいと思える幼稚園」

・幼児が「今日も幼稚園の生活が楽しかった」と思うような豊かな経験を積み重ねる。

（2）保護者が「子育ての拠り所と思える幼稚園」

・我が子の成長を実感し、広尾幼稚園でよかったという安心感・信頼感がもてる。

・幼稚園と家庭との役割を分担して子供の成長を一緒に見守る。

（3）教職員が「子どもとともに成長し、自信をもって創意工夫ができる幼稚園」

・教員自身の保育実践を通して、幼児が成長し変容する姿を喜びや自信に感じ、職務を遂行する。

・将来の日本社会を作る次世代を育成するという使命感と責任感をもつ。

【幼稚園経営の基本方針】

（1）保育の基礎基本を徹底する

保育の営みは、幼児が１つ１つの活動を効率よく進めることではない。

・教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して活動を展開できるような幼児の立場に立った保育の展開をする。

・教師が幼児の活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成する。

＊登園時の幼児観察・生活指導・遊びの援助・降園前の活動等、指導の型を作る。

（2）学級を中心とした保育展開

幼児にとって楽しい学級は、幼稚園生活の基盤となるものである。

・学級担任の指導の下、幼児一人一人の居場所ができ、情緒が安定し、自己を十分に発揮できるようにする。

・担任と信頼関係を築き、学級の幼児同士の関係を築くようにする。

＊担任の責任で環境を構成し、学級での遊びを充実させ、明るく楽しい学級づくりをする。

（3）教材研究の推進

幼児の遊びは、“もの、こと、ひと”と関わることを通して、様々な広がりを見せる。

・教師は、つねに教材研究をする必要がある。

・教材には、特性や使い方があることを理解し、研究に励むことが大切である。

＊教材の特性を理解し、正しい使い方をする。

（4）身近な自然、栽培活動を通した自然体験の充実

豊かな園庭を活用した活動は、季節の変化を感じたり、様々な発見をしたりして豊かな感性や生命を大切にしようとする心を育む。

・砂・水・土・風・雨・昆虫・様々な生き物に触れ、身近な自然事象とのかかわることは、科学的な思考の芽生え、考え方を育むことになる。

＊教師が自然への関心を高め、幼児とともに自然に親しむことが大切である。

（5）運動的な遊びの充実

オリパラ教育・運動遊びを通して、日常的に体を動かして遊ぶ機会を意図的・計画的につくる。

・保育の展開、環境・場の工夫を図り、日常保育のなかで実践する。

＊教師が体を動かして遊ぶモデルになるとともに、意図的に環境を構成する。

（6）併設小学校との連携の充実

小学校との接続期カリキュラム・就学前教育プログラムを活用した保育を実践する。

・質の高い就学前教育を実践する。

・４歳（年少組）から１２歳（６年生）の幼児・児童が同じ敷地で生活する環境を生かし、交流・連携を進める。

＊教育方法の違いや教育内容の相互理解を図り、質の高い教育を実践する。

（7）特別支援教育の推進

「ちがいをちからにかえる」日常の保育に取り入れ、実践を図る。

・どの幼児にも分かるように、ユニバーサルデザインの保育室環境を作る。

・学級担任と介助員等は情報を共有し、同じ方向を向いて指導に当たるとともに、全教職員共通認識のもと関わりをもつことが大切である。

＊保護者、教育委員会、関係諸機関との連携を図る。

（8）安全教育の推進

「自分の命は自分で守る」を幼児なりに理解させ、危険なこと、災害時の行動の仕方を発達段階に応じて指導する。

・学校園危機管理マニュアル、安全教育プログラムを活用し、安全教育を推進する。

・毎月の安全指導、安全点検ともに、幼児の動線を考慮した環境づくりを行い、事故の未然防止に努める。